

2017年8月31日

私立大学図書館協会
国際図書館協力委員会
委員長 稲垣 智成 様

中央大学図書館閲覧課
伊藤 親子

2017 年度海外認定研修 (B) 参加報告

2017年6月19日(月)から6月26日(月)まで、米国ニューヨークおよびシカゴでの研修に参加させて頂きましたので、以下の通り報告いたします。

I. 研修の目的

図書館先進国であるアメリカの大学・公共図書館を見学し、現地の図書館員との意見交換を通じて、図書館の現状や課題、取り組みなど最新事情を学ぶ。

II. 研修スケジュール

《ニューヨーク》

6月19日(月)	The Metropolitan Museum of Art The Museum of Modern Art, New York (MOMA)
6月20日(火)	Rutgers University Library Glorious Club
6月21日(水)	Columbia University Library SIBL (Science Industry Business Library) New York Public Library

《シカゴ》

6月22日(木)	Chicago Public Library Chicago Public Library China Town Blanch
6月23日(金)	Loyola University Library Chicago University Library
6月24日(土)	ALA 年次総会

*6月25日～26日は時差の関係で移動日である。

III. 報告

本研修では訪問した機関が多数あるが、本稿では大学図書館にしぼって報告する。

なお、以下の報告の中で出てくる数値は、見学当時の数値および各大学図書館 HP 等によるものである。

1) Rutgers University Library

ラトガース大学はニュージャージー州の州立総合大学で、1766年に創設された全米で8番目に古い伝統校である。キャンパスは3都市にあり、図書館の蔵書はプリント版、電子版を合わせると490万冊以上。世界最大のジャズコレクションなどスペシャルコレクションを保有し、デジタルプロダクションを率先的に進めている。

■ Alexander Library

大学本部のあるニューブランズウィック／ピスカタウェイキャンパスに所在し、地下1階地上4階の建物で、北棟と南棟がある。

北棟は主な書庫エリアになっているほか、行政文書のコレクションルームやレファレンスルームが設置されている。

南棟は主に個人やグループでの学習エリアが用意されているほか、3階に East Asian Library が併設されている。



北棟1階 Reference Room



南棟地下階 Study Area

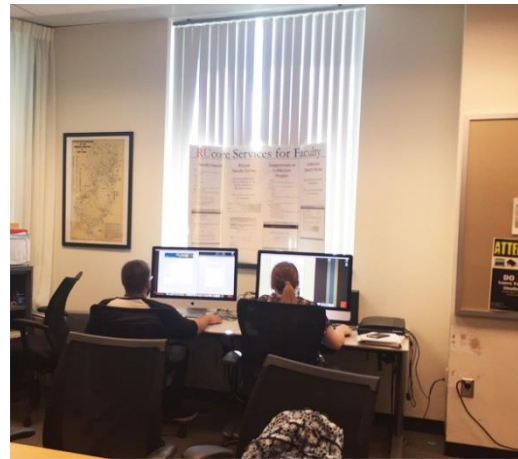
≫ Digital Curation Research Center

40TB ストレージの Mac、スキャナ、ネガ、規格の大きい資料のためのスキャナ、大判プリンタなどを備えた、資料のデジタル化と保存を行うセンター。デジタル化の具体例として、電子化されていない政府刊行物の電子化や、州立の資料館で予算不足のために進んでいない地域資料のデジタルライズなどが挙げられた。州立大学として地域貢献の意味合いがあるとのことであった。

スタッフは図書館職員のほか、図書館情報学専攻の学生ボランティアが主力となっており、教員と連携して課題に組み込み単位が取得できるようにするなど、学生協働のもと進めている。80 メガピクセルのカメラなど特殊な機器もあるが、学生は 1 時間程度のオリエンテーションで使えるようになるとのことであった。



大判地図からローマ時代のコインの細部まで認識可能なカメラ



センター内で学生スタッフが作業する様子

2) Columbia University Library

コロンビア大学は 1754 年創立、ニューヨーク州では最も古く、全米では 5 番目に古い、アイビーリーグに属する名門私立大学である。図書館は 20 あり、蔵書数は 1,340 万冊以上。Borrow Direct という 13 校からなるアイビー系大学コンソーシアムに参加しており、加盟館の資料取り寄せが可能となっている。

■ Butler Library

1937 年に設立された、アカデミック・ライブラリーとしては北米で最大規模を誇る人文社会科学系の図書館。1994 年に大規模リノベーションが行われている。

授業中は 24 時間開館しており、利用頻度も学内



トップである。その他、全米で最初に創られたレファレンスルームや、誰でも自由に入室が可能な貴重書・マニュスクリプトのコレクションルームがある。



全米で最初に創られたレファレンスルーム



貴重書とマニュスクリプトのコレクションルーム。大学のアーカイブなども。



雑誌コーナー。電子化を進めているため、雑誌名があっても空いている棚が多い。

図書館の方針として購入資料の電子化を進めていることから、書庫の利用は減少しつつある一方、学部生はモバイルを所持していても圧倒的にプリント版を利用するようである。教員や院生でも、学内にいる時は紙媒体の利用が多いとのこと。図書館としても、出版社やベンダーの都合で契約が変わってしまうため、電子資料に関しては懸念を抱いていると話があった。

なお、図書館には各専門分野の 40 名のスタッフがいるが、専門性があれば図書館情報学の学位は不要とのことであった。雇用後に図書館でトレーニングを行っており、そのようなスタッフは“野生の Librarian”と呼ばれている。

■ Science & Engineering Library

2011 年に新設された理工学図書館。3D プリンタをはじめとした各種プリンタやスキャナ、ワークスペースを備えた Digital Science Center が融合する形で併設されている。

図書は可能な限り電子ブックを購入し、雑誌は全て電子ジャーナル（基本的にアーカイバルアクセス権がある契約）としている、紙媒体の非常に少ない図書館である。冊子体は全て 2 階に配架され、1 階はグループスタディエリアとなって



おり、50台以上のPC端末が設置されている。1階には他にフリースペースが設けられており、ワークショップやブックトークなどが行われている。



1階 グループスタディエリア



2階 書架+学習エリア (向かって右側が書架エリア)



レファレンスサービスの案内画像

レファレンスカウンターには各分野の専門スタッフがおり、E-mail やチャットでの相談に答えている。OPAC で資料を検索して結果が0件だった場合はレファレンスデスクに問い合わせようポップアップが上がる仕組みや、1階にある大きな液晶モニタに定期的に Librarian の顔写真と専門分野、連絡先を映すなど、学生が困った時に尋ねる先の案内方法に工夫が見られた。なお、このモニタには、マナー啓蒙画像や契約データベースの宣伝なども表示され、大きさも含め一際目を惹く掲示板となっている。

3) Loyola University Library

ロヨラ大学は1870年創立、シカゴで最も歴史があり、米国のイエズス会系の大学では最大規模を誇る私立大学である。6つのキャンパスがあり、ローマにも分校がある。

■ Information Commons

2008年に設立。大学図書館と情報技術サービスを融合させ、学習活動やネットワークへのアクセスはもちろん、リラックスできる場としても提供されている。利用者数は1年間で学生が85万名、地域利用者も1万6千名にのぼる。

常時5人のスーパーバイザーが勤務し、50人の学生スタッフを使って運営を行っている。





1階 ヘルプデスク



1階 エントランス付近

Information Commons の名前の通り、館内は PC 端末が豊富に用意されている。1 階にある情報リテラシールームは経年で古くなっていたところを近年リノベーションし、従来のスクール形式から、正面に対して直角に座る島型に変更した。この形式の方が、講師と受講者の接触が増え、指導しやすいそうである。

2 階のデジタルメディアラボでは、13 台設置されている Mac を使って、映像や音声の編集などを行うことができる。その他、カメラ・充電器・ヘッドホンなどのデジタル機器の無料貸出や、大判ポスターの出力機器も整備されている。ポスターの出力は年間 800 枚ほどになり、操作については院生がサポートする態勢がとられている。



1階 情報リテラシールーム

ロヨラ大学図書館では数年毎に戦略方針を策定しており、2013 年から 2017 年においては、柔軟な情報インフラの整備、ユーザエクスペリエンスの向上、大学図書館が指導的・文化的プログラムの内容と質を向上させることを目標に、図書館運営を行ってきたとのことである。その他、質疑応答で興味深い回答のものを何点か紹介する。

Q. eBook は期待通り使われているか？ PR 方法はどのようにしているか？

A. 利用率に関するターゲットは特にないが、印象では使われている様子。プロモーションとして学部には eBook 教材を勧めているが、教員が紙がよいと無視することもある。PDA*は減少させた。出版者が利用期間を短くし、短期利用の値段が上がったためである。

* Patron-Driven Acquisitions … 利用者の希望や利用に応じて資料を購入したり、検討を行う選書方法の一つ。

Q. 情報リテラシー教育やワークショップの参加率が低い時はどうするか？

A. 課題のひとつとなっている。学生が自ら参加することではなく、教員から「受けたほうがよい」という強い推薦がないと来ないため、教員へのアウトリーチが重要である。例えば、図書館員が教室に出向く、参加すると単位を与える仕組みにする、新入生の必須カリキュラムにするなど。なおロヨラ大学では、新入生は 2 つの情報リテラシー授業（慣例プログラム）を受けることになっている。

Q. チャットレファレンスを実施しているが、職員はどのように関わっている？

A. AJCU（イエズス会大学協会）のコンソーシアムで実施しており、24 時間司書が交代で対応している。職員は関わっていない。

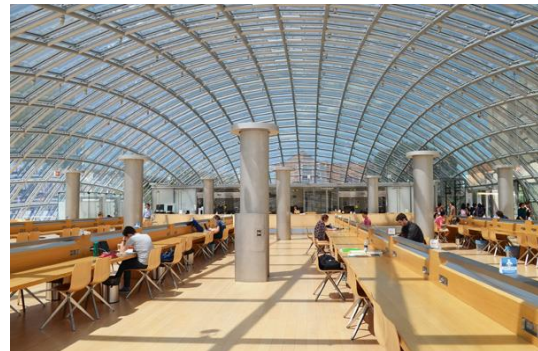
4) Chicago University Library

シカゴ大学は 1890 年に創立された、アイビーリーグと並ぶアメリカ中西部の名門私立総合大学。経済学・社会学の分野における「シカゴ学派」が有名。蔵書数は約 1,130 万冊。

■ The Joe and Rika Mansueto Library

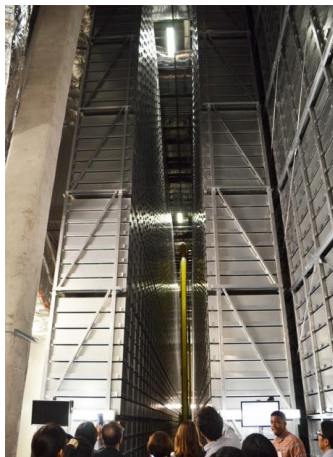
図書館名にもなっている卒業生夫婦からの寄付（約 25 億円）により 2011 年に設立。学習フロアである 1 階と、深さ約 16.7m の地下書庫の 2 層構造で、入館は The Joseph Regenstein Library からとなっている。

1 階は約 743 m² で座席数は 180 席あり、机には蛍光灯、電源タップ、ネットワークコンセントが設置されている。1 階に資料は全く無く、



1 階 Grand Reading Room

全てカウンターで出納依頼する利用方式である。外壁となるドイツ製ガラスパネルの総数は 690 枚で、紫外線・赤外線を遮断し、温度調整、採光量の調整が可能とのこと。学期中は満席になる人気スポットとなっている。



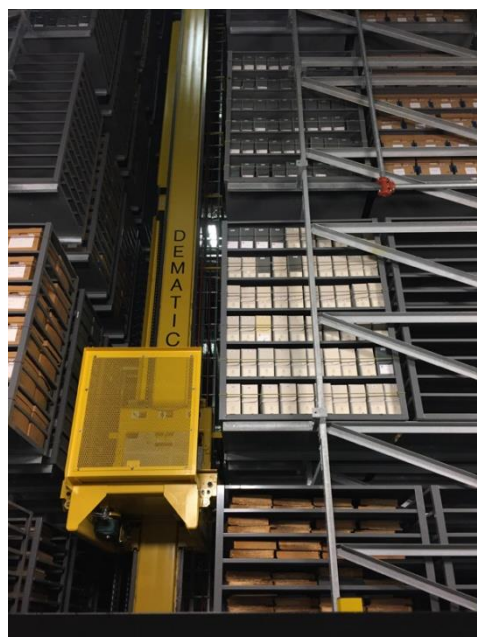
地下書庫の様子

地下は最大 350 万冊収蔵できる自動書庫となっており、ロボットクレーンにより出納所用時間は平均 3 分で、利用者からの評判は概ね良好とのことであった。全コンテナをこれまでに 3 回チェック（≒蔵点）しており、故障などの不具合対応については、月に 5 回程の頻度で、契約している技術者が書庫内に入り微調整を行っている。

コンテナとは別に、大型本や貴重書などの平置き保存のためのシェルフがあり、シェルフごと出し入れを行うという方式であった。



[上] コンテナを運んできたところ



[右] 大型本や平置き資料のためのシェルフ
奥のシェルフにある資料を出すために
手前の棚を一度取り出す必要がある

■ The Joseph Regenstein Library

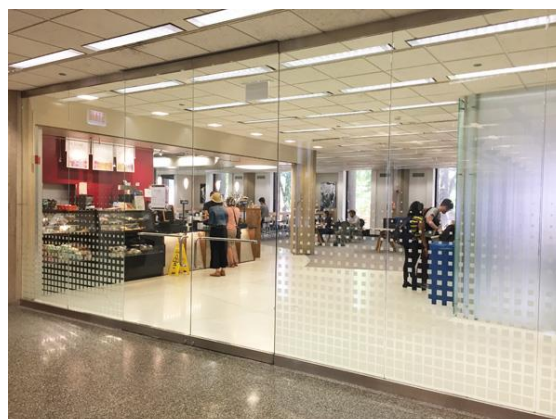
1970年に設立された人文社会学系の図書館。地下2階、地上5階の構造で、5階には東アジアコレクションが収蔵されている。

1階の入館ゲートを通ると正面にレファレンスカウンターがあり、その奥は携帯電話の利用やグループワークが可能なオープンな学習エリアが広がっている。

レファレンスカウンターのそばにある TECH B@R では、ITセンターの職員と専門の学生が、利用者が持ち込んだPCやスマートフォンなど電子機器の不具合や相談などに応じている。奥にはレファレンスコーナーを撤去して設置したカフェがあり、これは館内での飲食を段階的に進めていった結果、設置することになったとのことであった。



TECH B@R
持ち込みの電子機器の相談が可能

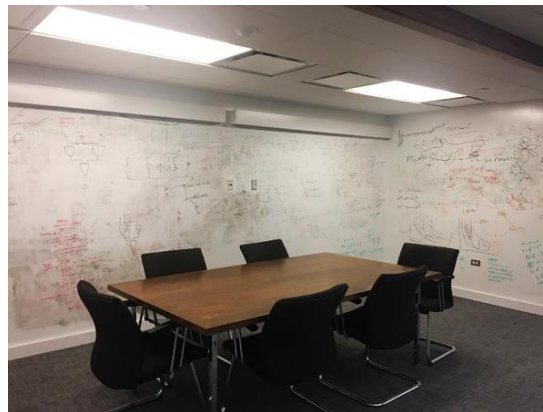


学生が運営するカフェ Ex Libris Café
Ex Librisとは蔵書票のこと

地下1階は Collaborative Learning Center と呼ばれるラーニングコモンズとなっており、グループワークスポットとして学生に人気の場所となっている。



地下1階 ラーニングコモンズ
書架の無い広い空間、飲食が可能



地下1階 ラーニングコモンズ
壁や間仕切りがホワイトボードになっており、自由に利用することができる

IV. 所感

以前より実際に見学したいと考えていたアメリカの大学図書館や公共図書館を訪ね、現状や課題、問題解決への取組や考え方を知ることができ、大変参考になると共に大いに刺激を受けた。報告には書ききれなかったが、学生協働や寄付金の獲得に対する姿勢など、印象的な事項が多くあった。また、コロンビア大学バトラー図書館の“野生の Librarian”をはじめ、“司書と専門性”についても強く意識させられた。米国と日本では文化的な背景や環境が異なるとはいえ、現地の Librarian が専門職としてたゆまぬ努力を続け、戦略的に考え、研究を支える様子を見て、図書館員として何をすべきか、良いサービスとは何かということを改めて考えさせられた。今回の経験を日々の業務に活かし、自身も研鑽を積みたいと思う。

さいごに

本研修では多くの知見を得ると共に、司書資格を持つ大学職員として今後どうあるべきかを改めて考えさせられる素晴らしい機会となりました。このような貴重な機会を与えてくださった私立大学図書館協会の皆様、ツアーを企画下さった ALA・米国図書館研修事務局（丸善雄松堂株式会社様、図書館総合展運営委員会様）の皆様に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。